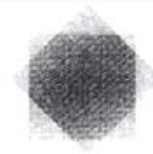


# モノグラフ・高校生'97

vol.49 高校生の競争観と共生観



上智大学教授 武内 清徳  
神奈川県立湘南高等学校教諭 穂坂 明德  
大正大学講師 大野 道夫  
千葉県立佐倉高等学校教諭 畠山 滋  
明治学院大学非常勤講師 吉川 杉生  
上智大学大学院生 黒河内利臣

## ●目次

はじめに	2
要約	4
第1章 調査の意図と調査対象者の属性	8
1. 調査の意図	8
2. 調査対象校の特質	11
3. 調査対象者の属性	13
4. 調査対象者の生活時間	13
第2章 学校、教師と生徒の競争観	15
1. 学校の特徴と生徒の競争心	16
2. 教師の教育指導と競争観	22
3. 教育現場と競争的指導観	26
第3章 友人関係と競争観	27
1. 推薦入学をめぐる競争	27
2. クラスの友人関係	28
3. クラスメイトとの共生の可能性	30
4. 友人関係の満足度と競争	31
5. 親の期待と競争観	36
6. やさしきカプセル人間—コミックにおける競争と共生—	41
第4章 ジェンダーと競争観	43
1. 競争意識の強い男の子、弱い女の子	43
2. 好きなスポーツのジェンダー差	46
3. 職業選択のジェンダー差	46
4. 失敗や挫折への対処のジェンダー差	48
5. 共生志向、控えめが美德の女の子	48
6. 男の子と女の子で違う親の期待	50
第5章 学業成績と競争観	51
1. 成績上位者の競争観と「意味ある他者」	52
2. 成績下位者の競争観と成績の意味	55
3. 成績中位者の競争観と共生観	57
4. 競争へ動機づける「火種」	57
第6章 親からの期待と競争観	59
1. 親たちの期待すること	59
2. 親の期待と学年差・成績差	64
3. 親の期待と家庭環境	68
4. 親の期待と競争意識	72
第7章 生徒にとっての競争と共生	75
1. 競争における生徒の位置づけ	75
2. 共生体験のゆくえ	83
まとめ	88
おわりに	94
資料1 調査票見本	95
資料2 基礎集計表	108

## はじめに

われわれは、多かれ少なかれ競争の存在する社会に生きている。競争と教育のかかわりも深く、その実態把握、指導のあり方をめぐってさまざまな議論が行われている。

例えば、時代とともに競争観は変化しているのか、受験競争は諸悪の根源かそれとも青少年に残された唯一の鍛練場か、受験競争において社会的不平等は存在するのか、学校における競争は一元的基準の競争なのか多元的基準での競争なのか、大きな競争なのか微細な差異競争なのか、個人競争なのか集団競争なのか、競争相手（ライバル）は誰か、競争心をたきつけるのは誰か、学校で成績順位を発表すべきか、学校行事（運動会、合唱祭）の順位づけを廃止すべきか等々のさまざまな議論がある。

豊かな社会に育った現代の青少年には競争心やハングリー精神が欠けていると言われるが、その評価をめぐって対立した見方がある。

1つは次のような意見である。現代の青少年には、かつての青年が抱いていたような大志がみられない。ビッグな目標を掲げ、孤軍奮闘し、初心を貫徹する迫力のある若者はどこにってしまったのだろうか。豊かな社会のなかでハングリー精神を失った今の若者世代に次の日本社会を任せるのは心配である。それに対して、公害、環境破壊を推し進めてきたこれまでの企業社会の期待する立身出世型の競争観を否定する「やさしき世代」の出現は歓迎すべきものである。弱者、高齢者への共感能力をもって共生をより所とする新しい世代の生き方こそ、これから求められているという意見がある。

高校の教育現場でも、受験勉強、受験競争を通して生徒をきたえるべきなのか、それとも受験指導は最低限やるにしても、受験より大切なことが（例えば、学問、芸術、読書、部活動、さまざまな人との出会い、ボランティ

ア活動等)あることを生徒に教えるべきなのかと、日々悩むことが多いであろう。部活動の指導においても、勝つことをめざして指導すべきか、楽しくやるべきかの二者択一を迫られる。

以上のような議論をするとき、とかく当の生徒自身はどう考えているのか、どう行動しているのかを等閑視し、おとなだけの議論になることが多い。ある方向へ生徒を指導するにしても、生徒の実態を知らなくては、その指導は空回りになるであろう。

以上のような問題意識で高校生の競争観と共生観をさまざまな側面から探ったのが、本調査である。

4校の2,058名の高校生(1年～3年)から回答を得た。調査にご協力いただいた生徒諸君、先生方に感謝したい。

深谷昌志教授をはじめ同人会のメンバーから貴重な意見を多く得た。感謝したい。

なお、本報告書の、執筆分担(執筆順)は以下のとおりである。

- 武内 清 (上智大学教授)  
1章・4章・まとめ
- 穂坂明德 (神奈川県立湘南高等学校教諭)  
2章
- 畠山 滋 (千葉県立佐倉高等学校教諭)  
3章
- 黒河内利臣 (上智大学大学院生)  
5章
- 吉川杉生 (明治学院大学非常勤講師)  
6章
- 大野道夫 (大正大学講師)  
7章

平成9年3月

上智大学教授 武内 清



## 高校生の競争観と共生観

### 要 約

#### 第1章 調査の意図と調査対象者の属性

① 現代は成功も失敗も大きくない「豊かさのアノミー社会」(竹内洋)になり、日本人の競争観にもゆらぎが生じている。若い世代の数の減少が続いて、大学の入学定員より、大学志願者の数が少なくなる時代がまもなく来ようとしている。このような中において、高校生たちはどのような競争意識、将来像を描き、友だちとつき合い、学校生活や家庭生活を送っているのだろうか。また、どのような共生観をもっているのだろうか。

② 今回の調査対象校は4校である。学校の所在地は北海道2校(A校、B校)、山梨1校(C校)、東京1校(D校)である。東京の1校(D校)のみ私立で、残り3校は公立である。調査回答者は高校1年～3年の2,058名。男女比はほぼ半々(男子1,001名、女子1,036名、不明21名)。調査時期は1996年10月である(p.11表1-1、p.12表1-2)。

競争の好きな子が3割、嫌いな子が3割、中間が4割である。部活動は「運動部熱心」な生徒が3割、「文化部熱心」な生徒が1割、「参加していない」生徒が4割弱いる。成績(自己評価)は上4%、中の上23%、中30%、

中の下23%、下18%である。家での勉強時間は「ほとんどしない」が2割強、「2時間以上」が4割弱。テレビ視聴時間は、「2時間以上」が6割弱。塾、予備校には約3割の生徒が通っている。将来の進路希望は、大学・短大までが4分の3いる。きょうだい数は2人が多く(5割)、次いで3人(3割)。出生順位は1番目が一番多く(5割弱)、次いで2番目(4割)(p.14表1-3、4)。

#### 第2章 学校、教師と生徒の競争観

① 生徒の競争心は、学校が受験指導や部活動に力を入れるほど高じるが、そのような学校では学校への満足度は低下し、競争心を忌避する生徒層も厚くなる。自由な雰囲気や教師-生徒関係も良好な学校では、競争心が極端に増幅されたり、またなえさせたりすることはない。このように、学校の特色が競争心の強化や弱体化にあずかっている。(p.16~21表2-1、3、5、図2-2、3)。

② 日頃から成績の上位者を公表したり受験を話題にする教師に接している生徒は、約7割と多い。「受験は自分との戦いである」という教師のセリフを約4割がよく耳にする。教師の言動が競争に向かうほど生徒も動機づ

けられて競争意識がおおられる。生徒の競争観の形成に教師の教育指導の果たす役割は大きい(p. 22~25 表2-6、7、8、図2-4)。

### 第3章 友人関係と競争観

- ① 現代の高校生の受験競争には、かつての迫力はみられない。
- ② 生徒のクラス内での交友関係は良好に見える。しかし、関係のモチ方は表面的で、それほど深いものではない。「勉強上のライバルがいる」生徒は4割強、「スポーツのライバルがいる」生徒は3割弱にとどまる。また少数ではあるが、いじめの関係も見逃せない(p. 29 表3-1)。
- ③ 生徒はさまざまなタイプの高校生に対して許容的で、共生の許容度はかなり広いものの、それはつまり生徒を嫌うように自分の領域を侵さない範囲に限られている(p. 30 表3-2)。
- ④ 7割弱の生徒が友人関係に満足している。特に女子や部活動に熱心に参加している生徒の満足度が高い。競争好きな生徒の友人満足度の数値も高い(p. 32 図3-1、p. 33 図3-2)。
- ⑤ 生徒の競争心は旺盛とはいえない。勉強やテストでも「かなり張り合う」は2割しかない。そして、「やさしさや思いやり」は人一倍もちたいと思っている。自分の得失のかかった場(推薦先、レギュラーの座)では競争心を出す(p. 34 表3-3、p. 35 図3-3)。
- ⑥ 親が子どもに(成績、友人関係について)期待をかけると、子どもの友人関係はよくなり、競争心もやや強くなる(p. 37~40 表3-4、5、6、7)。
- ⑦ 現代のコミックヒーローはファンタジックで現実感が乏しい。最近の生徒も同様である。そ

れは、彼らがあえて人の心に踏み込まない「やさしさ」のカプセルに包まれているためであろう。

### 第4章 ジェンダーと競争観

- ① 男女とも競争に対してアンビバレントな気持ちをもっている者がかなりいる。しかし競争観の強いのは男子、弱いのは女子という男女差ははっきりある。男子は、運動面と学業成績面とで友だちに負けたくないと思っている。それに対して、女子は友だちへのやさしさや思いやりを重視している(p. 44~45 図4-1 表4-1、2)。
- ② 学校場面での競争をめぐるジェンダー差をみると、男子は「受験競争は、他人との競争である」「学校では、競争に勝ち抜く力をきたえたい」「部活動は、勝つためにやる」という競争的意見を多くもっている。女子は「受験競争は、自分との戦いである」「学校では、お互いに助け合う心を育てたい」「部活動は、楽しくやるのが大切」と、協同性(共生)を重視する意見が多くなっている(p. 45 表4-3)。
- ③ 将来の職業を選ぶとき、給料、休暇といった実利的な面を男子は重視し、専門性、社会性といった理想的な面を女子は重視している(p. 47 表4-5)。
- ④ 親は男の子に対して「よい成績をとり」「4年制大学に進学し」「一流大学や会社に入る」ことを期待している。女の子に対しては人を押しのけ前に進むより一步ゆずって控えめにするのが美德という女性の伝統的価値観を期待し、その期待を現代の女子生徒も内面化している(p. 50 表4-8)。

### 第5章 学業成績と競争観

- ① 成績上位者は、他人との競争に参加する

意志を強くもっている。彼らは同世代の見えない相手をライバルとして想定し、自分なりに努力をすることが勝敗に結びつくと考えている。彼らは「高校の勉強はプラスになる」「自分のための勉強だ」と考えている（p. 52～55 図5-1、3、5、7、10）。また意味ある他者としての父親の存在が大きい（p. 55 図5-9）。

② 成績下位者は、「競争があると心配になる」し、「人と競争するのが嫌い」である。「生きていく上で競争は大切」とは思わない。自分の成績のことで傷つき、学歴のことも気にしている。彼らは見えない同世代をライバルとは考えない。父親、母親からあまり期待も心配もされていないと思っている。しかし友人や恋人が彼らの心の支えになって、「生きていく上で助け合いが大切」と共生観を育てている（p. 52～56 図5-1、5、7、8、9、10、11、12）。

③ 成績中位者は、競争と共生の両方への指向性をほどほどにもっている。「競争は好きでも、嫌いでもない」。彼らは両親や友人から「がんばれ」と励まされ、母親と友人もいつも身近にいて、励ましなぐさめてくれる。ほどほどの競争心を持ち、共生意識もかなりある（p. 52～56 図5-1、2、4、5、6、8、9、10、12）。

## 第6章 親からの期待と競争観

① 親たちの過半数は子どもに対しての期待を口にし、「がんばりなさい」と語りかけている。この期待には子どもの性差が反映している。また親たちが子どもに期待する11の項目を因子分析にかけると、他者を「思いやる期待」と「上をめざす期待」の2つのタイプに分かれる（p. 59～63 表6-1、2、図6

-1、2）。

② 子どもに向けられるこうした親の期待の内容は学年によって異なり、1年生では部活動や生徒会から友だち関係まで多様性をもつが、2年、3年では成績に関する期待に一元化していく（p. 65 表6-3）。

③ 書籍を400冊以上持つ文化的背景のある親たちは子どもへの期待が高く、また実際にその期待を口にする機会が多いという傾向がみられた（p. 69 表6-5、6）。

④ こうした期待を親が実際口に出すことは子どもたちの競争に対する肯定的な意見と結びつく。特に「部活動で活躍すること」「一流大学や会社に入ること」などの期待は、競争心を喚起する。しかし「よい成績をとること」への期待は必ずしも競争への肯定観へとは結びつかない（p. 73 表6-8）。

## 第7章 生徒にとっての競争と共生

① 遠く大きい目標の達成をめざすだけではなく、近くささやかな目標の充足をめざす競争観も存在する。生徒たちは、大きい目標として勉強、スポーツをあげ、ささやかな目標として趣味活動、クラスの活動をあげている（p. 77 図7-2）。

② 教師の生徒の成績に対する励ましは、勉強に対する大きな目標の達成（よい成績をとりたい）や、勉強に対する小さな目標の充足（よい成績がとれなくても自分なりに勉強したい）を喚起する。勉強上のライバルの存在は、勉強に対する大きな目標の達成意欲を高める。何でも話せる友人の存在は、勉強に対する小さな目標の充足を勧め、無気力を弱める。親の成績への期待は、大きい目標への達成を喚起するが小さい目標への充足を弱める（p. 79～81 表7-2、3、4）。

③ お年寄りに席をゆずる、入院中の友人を見舞う、空きカンを拾うなどの共生体験は、6割近くの生徒がしている。教師、友人、親の勧めや期待が生徒の共生体験を増加させている（p.83～85 表7-5、6、7、8）。

④ 競争の好き嫌い、上記のお年寄りに席をゆずる、入院中の友人を見舞う、空きカンを拾うなどの共生体験との関係をみると、競争好きと共生体験の非対立タイプは約4割いる（p.87 図7-4）。

#### 〔まとめ〕

- ① 今の若い世代のなかにも個人主義ではなく、集団生活を優先する思想は生きている。
- ② 高校時代の競争体験や共同体験がその後どのような結果を生むのかが検討されねばならない。
- ③ 今後教育の分野では、女子の競争観への指導が教育者のジェンダー観も問われながら問題となるであろう。
- ④ 「意味ある他者」の存在が意図的にも無意図的にも競争意識、共生意識の形成に果たす役割は大きい。
- ⑤ 現実の社会と教育との結びつき、そこでの人々の生きざま、意見などをもとに競争と共同（共生）の関係が具体的に検討されねばならない。
- ⑥ 競争へのたきつけが、人々の欲望（意識）からではなく選抜システムからきているのであれば、選抜システムの制度自体を改革していくことが肝要であろう。
- ⑦ 若年人口の減少、そして企業の人材の選抜の基準が徐々に、学歴、学校歴から実力に変わりつつある中で、日本の教育システムも社会の変化の挑戦を受けつつある。教育と社会の関係のメカニズムを冷静に見極め、教育指導のあり方を考えていくことが大切であろう。

#### 〔調査概要〕

対象●北海道・山梨・東京の公立・私立高校  
4校の1～3年生2,058名（男子1,001名、女子1,036名、不明21名）

時期●1996年10月

方法●学校通しによる質問紙調査

## 第1章

# 調査の意図と 調査対象者の属性

## 1. 調査の意図

### (1) 競争社会の変貌

我々は、未来にむけて努力し、向上することが価値あることとされる社会に生きている。つまり競争意識をもち、他者との比較のなかで、やる気を鼓舞するのは自然なことである。人々の競争意識の背後には、競争心をあおることによって社会の活力を引き出している近代以来の日本社会のシステムが存在する。

しかし、豊かになった現代の日本は、竹内

洋の指摘するように、「成功大・失敗小」の19世紀のアメリカとも、「成功大・失敗大」のかつての日本とも、「成功小・失敗大」の生存競争社会とも違う、「成功も失敗も大きくない」豊かさのアノミー社会にあって、日本人の競争観にもゆらぎが生じている（図1-1）。

現代の日本においては、子どもの出生率が落ちて若い世代の数の減少が続いている。大学の入学定員より大学志願者の数が少なくな

図1-1 豊かさのアノミー



(竹内洋『立身出世と日本人』NHK人間大学、1996、107頁)



る時代がまもなく来ようとしている。このような教育の分野での無競争社会の到来を前にして、高校生たちはどのような競争意識、将来像を描き、友だちとつき合い、学校生活や家庭生活を送っているのでしょうか。

## (2) 競争と協同

これまで、競争をめぐるさまざまな議論があった。

カイヨワ=多田道太郎によれば、競争は、模擬、眩暈、運と並ぶ遊びの一種で、計算と意志にもとづき、人類に進歩をもたらすものである(『管理社会の影』筑摩書房、1971)。一方、競争心を社会の構成原理にしない社会もあることは早くから指摘されてきた。A. コーンは、競争が必要不可欠というのは誤りで、競争ではなく協同原理で住みやすい社会をつくれるとしている(A. コーン『競争社会を越えて』法政大学出版会、1994)。

教育と競争との関係をめぐっても、さまざまな議論があった。

社会心理学の実験で次の点が明らかにされている。競争では利己的な利害がぶつかりあい、協同関係では友好的雰囲気形成され、適切な分業体制が形成されやすい。教育場面でもこの知見を取り入れ、競争を押さえ、協同関係を取り入れる試みがさまざまなされてきた(末吉梯次『集団学習の研究』明治図書、1958)。

一方、勉強や運動への動機づけが競争によって強められることも確かであり、競争のもつ機能が有効に利用されれば教育効果が高まることから、教育の場面にもさまざまな競争が取り入れられてきた。受験競争、成績発表、通知表、対抗試合、運動会、各種行事での順位づけなどである。

## (3) 日本人の競争観

競争をめぐる意識について、とりわけ日本人の競争観の特質や今の青少年の競争観の特質について、さまざまに論議されている。例えば、次のようなことである。

日本人は個人単位の競争より、組織や集団単位の競争を好むのではないか。

大きな競争はなくなっても、微細な差異化競争は激化しているのではないか。

人に抜きこんでることよりは、人より遅れることを恐れる心性が優位になっているのではないか。

競争を鼓舞する人は誰か。競争の目標となる人は誰か。競争のライバルは誰か。

なぜ、がんばり主義(努力型競争観)が蔓延するのか。

他者との競争というよりは、自分との戦いと考えるようになっていないか。

男子と女子とでは、競争観が違うのではないか。

競争へのたきつけ(動機づけ)は、主体の欲望からくるのか、それとも選抜システムからくるのか。

現代の青年は競争よりは共生や自己実現を求めているのではないか。競争から共生への道筋は何か。

親や教師は競争・共生をめぐる何ができるか。

## (4) 高校生の競争意識

さらに、現代の高校生の競争意識に焦点をあてていけば、次のようなことが問題になる。

1. 今の高校生は、自己を向上させるのに役立つ競争心が失われつつあるのではないか。また、他者との共同性を高める競争心がなくなりつつあるのではないか。

2. 過度で、一元的、利己的な競争心に駆られ、視野を狭くしている高校生がいる一方、競争から降りて無気力に陥っている高校生がいるのではないか。

3. 学校文化、教師の指導(教育指導)、部活動は、生徒の共同(共生)意識の形成にどのような影響を与えているのか。今、教師は何をなすべきなのか。

4. 生徒文化、友人関係は高校生の競争心、共生意識の形成にどのような影響を与えてい

るのか。生徒集団、生徒文化に対する教師の指導はどうあるべきか。

5. 生徒の競争心、共生意識の構造はどのようなになっているのか。その社会的、心理的関連を明らかにし、その変容の方策を探る。

6. 競争から共生への変容は、どのようにしたら可能なのか。

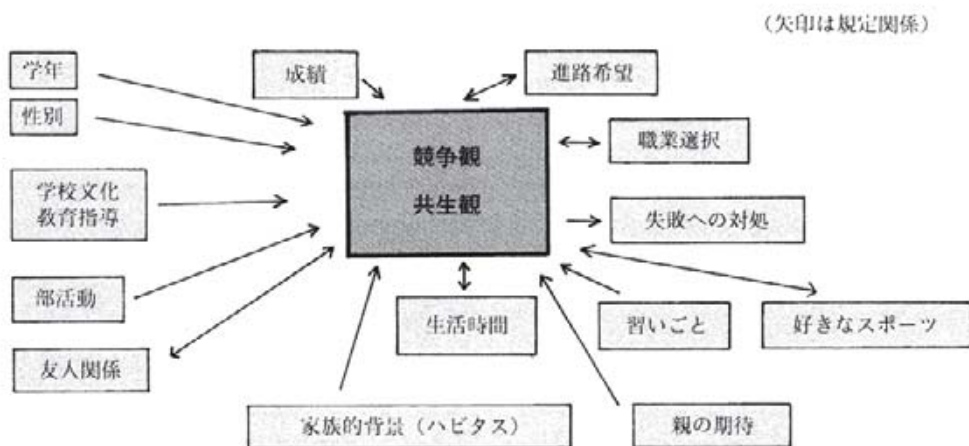
7. 両親のハビタス、家族の子どもへの期

待等は、高校生の競争心、共生意識の形成にどのような影響を与えているのか。親は何をなすべきか。

### (5) 競争についての質問項目の構成

以上のような問題意識から、図1-2のような質問項目を作成した。

図1-2 分析図式(質問項目)



## 2. 調査対象校の特質

### (1) 伝統、大学・短大進学率

今回の調査対象校は4校である。学校の所在地は、北海道2校（A校、B校）、山梨1校（C校）、東京1校（D校）である。東京の1校（D校）のみ私立で、残り3校は公立高校である。

調査対象校の4校とも、高校の入学難易度のレベルは、ほぼ等しいといってよいであろう。

A校は創立が昭和40年代と比較的新しい。北海道の大都市の中にあって、入学偏差値でその地区の数番目に位置する進学校である。4年制大学進学希望率は70.8%。昨年は北海道大学に8名、その他の国公立に42名、私立大学に352名（早稲田1名ほか）合格している。入学後の指導には定評のある高校である。

B校は、創立は大正10年代と比較的古い。北海道中西部の都市にあって、その地区のトップ校である。4年制大学進学希望率は75.6%。生徒の学力の幅は比較的あり、校風は自由なのが特徴である。

C校は創立が明治30年代と古い。山梨県の一都市の進学校である。4年制大学進学希望率は51.5%。昨年の進路先（決定数）は、国公立大学へ26名、私立大学に116名、短大に58名、二部2名、専門学校70名、就職26名である。校訓は「質実剛健」をもってし、教育方針として「文武両道の教育を推進し、個性を伸ばし心身共に健全な人間を作る」を掲げ、スポーツ（部活動）も盛んな学校である。

D校は創立は昭和20年代。中高一貫校で大学、短大も併設している。東京の郊外に位置する。4年制大学進学希望率は65.0%。昨年の国公立大学合格者は9名、併設の私立大学へ75名、その他の私立大は276名（早稲田10名ほか）、短大には41名合格している。キリスト教主義の人格教育を教育の特色とする男女共学校である（表1-1）。

### (2) 生徒からみた学校の特徴

学校の特徴と思われることを生徒に尋ね、学校ごとに「そう思う」という割合を、表1-1に示してある。

表1-1 調査対象校の特質

学校名	所在地	公立・私立	学校創立年	4年制大学志望率	学校の特徴（「そう思う」割合）					
					受験指導	就職指導	部活動	学校行事	自由な雰囲気	校則きびしい
A校	北海道	公立	昭和40年代	70.8	93.2	6.8	46.8	33.6	14.4	64.0
B校	北海道	公立	大正10年代	75.6	82.8	2.5	86.0	47.1	83.5	13.9
C校	山梨	公立	明治30年代	51.5	82.6	27.8	96.7	46.7	17.0	82.2
D校	東京	私立	昭和20年代	65.0	64.7	18.9	65.0	17.4	24.6	58.7

それによると「受験指導に力を入れている」は、公立3校（A、B、C）では「そう思う」が8割以上と高くなっているのに対して、中高一貫校で大学を併設しているD校（私立）でのみ低く（64.7%）なっている。

「就職指導」は就職者の割合に比例して、C校（27.8%）、D校（18.9%）で多少力を入れている。

「部活動」に力を入れているのは、山梨のC校（96.7%）、次いで北海道のB校（86.0%）である。A校（46.8%）は不活発である。

「学校行事」が盛んなのは、部活動の盛んな学校と同じくB校（47.1%）とC校（46.7%）である。

「自由な雰囲気」があるのは圧倒的にB校（83.5%）。その他の3校は、自由な雰囲気はあまりないと生徒は感じている。

「校則や生活指導のきびしい」のは、C校（82.2%）であるが、A校（64.0%）とD校（58.7%）もかなりきびしい。自由な雰囲気のあるB校は、校則はゆるやか（13.9%）。

以上から、今回調査対象の4校の特徴は次のようにまとめられる。

4校とも、学力レベルは中の上の学校である。

A校は、受験と生活指導に力を入れている学校。

B校は、受験のみならず、部活動、学校行事が盛んで、生徒の自主性を重んじ自由な校風の学校。

C校は受験と部活動と生活指導に力を入れ、文武両道をめざす学校。

D校は、それぞれがほどほどの、大学併設ののんびりした中高一貫の私立高。

### （3）サンプル構成

今回の調査対象者のサンプル構成を学校別に示したのが、表1-2である。調査実施の都合で、バランスのとれたサンプリングとはなっていない。全体の半数が、B校の生徒である。B校のみ、全学年を網羅しているが、A校は2年生のみ、C校とD校は1年生のみとなっている。男女比は各学校ともほぼ半々となっているが、B校、C校では若干男子が多く、A校、D校では、若干女子が多い。学校別データをみるときは、この学年の偏りや男女比にも注意したい。

表1-2 調査対象校別サンプル構成

	全 体	男 子	女 子	不 明	1 年	2 年	3 年
A 校	425	193	229	3	0	425	0
B 校	1,058	529	519	10	328	340	390
C 校	241	122	114	5	241	0	0
D 校	334	157	174	3	334	0	0
合 計	2,058	1,001	1,036	21	903	765	390

### 3. 調査対象者の属性

(不明は省略)

①学年別	1年43.9% 2年37.2% 3年19.0%	短大まで 4.2% 大学以上70.1% わからない16.3%
②性別	男子48.6% 女子50.3%	
③部活動	運動部熱心32.3% 運動部熱心でない11.4% 文化部熱心11.8% 文化部熱心でない7.6% 以前参加17.1% 参加したことがない18.7%	⑥きょうだい数 1人 5.7% 2人54.1% 3人31.7% 4人以上 4.1%
④成績(自己評価)	上 3.8% 中の上23.4% 中30.2% 中の下22.8% 下17.8%	⑦出生順位 1番目45.9% 2番目38.9% 3番目 9.9% 4番目以降 0.9%
⑤将来の進路希望	高校まで 1.6% 専門学校まで 6.0%	⑧競争の好き嫌い とても好き 6.8% やや好き22.8% どちらともいえない37.9% やや嫌い17.7% とても嫌い13.1%

### 4. 調査対象者の生活時間

#### (1) 調査対象者の生活時間

ふだんの日の生活時間は、表1-3のとおりである。

家でほとんど勉強しない生徒は23.5%いる。学校別にみると、家で勉強しない生徒は私立のD校(45.5%)に多く、B校(13.4%)に少ない。A校(27.8%)とC校(29.9%)はその中間である。

部活動をほとんどしない生徒は39.1%いる。学校別にみると、部活動をしない生徒はA校(54.8%)とB校(44.5%)に多く、D校(15.3%)とC校(20.3%)に少ない(D校とC校に部活動参加者が多いのは、調査対象

者が1年生のせいもある)。

#### (2) 塾、予備校、おけいこ通い

表1-4は、塾、予備校、おけいこ通いについて尋ねた結果である。

塾、予備校に約3割の生徒が通っていることが注目される。学校別では、B校(36.0%)に多く、A校(12.5%)に少ない。受験指導に力を入れているのはB校でなくA校である。A校のように学校で受験指導を強化すると、生徒は塾、予備校通いをせず、B校のように学校で受験指導をしないと、生徒は受験指導を塾や予備校に求めるという対応関係がみられる。

表1-3 ふだんの日の生活時間

	(%)							
	ほとんど しない	30分 くらい	1時間 くらい	1時間半 くらい	2時間 くらい	2時間半 くらい	3時間 くらい	4時間 以上
部(クラブ)活動	39.1	1.4	3.8	5.9	17.5	13.0	13.6	2.4
家での勉強	23.5	9.6	16.2	10.7	17.0	5.1	9.5	5.7
塾や予備校での 勉強	67.3	0.8	2.6	4.2	6.6	2.3	7.3	1.7
テレビを見る	5.6	5.0	17.8	11.3	26.0	8.7	14.0	9.0
外出時間	25.0	8.2	13.3	6.7	11.0	4.2	8.8	19.9
アルバイト	87.9	0.5	0.7	0.5	0.5	0.2	0.9	2.5
家の手伝い	42.7	36.9	12.1	2.3	1.6	0.3	0.3	0.7

表1-4 塾、予備校、おけいこ通い

	(%)		
	全 体	男 子	女 子
予備校・塾・家庭教師	28.9	30.1	27.2
音楽	11.3	4.9	17.3
スポーツ関係	7.4	9.1	5.6
英会話	6.1	3.8	8.3
その他	7.2	6.4	8.0

## 第2章

# 学校、教師と生徒の競争観

受験過熱の病理が問題化していた1970代の後半にヒットし、一世を風靡したポップスに「青春時代」(作詞・作曲 森田公一)という曲がある。そこで歌われている歌詞の中身は、恋愛にしろ勉強にしろ、とにかくかたくななまでに思い悩み、物事に一途に打ち込むひた向きの青春の姿であった。それゆえに、後で青春を振り返ってみれば、甘酸っぱいほろ苦さも感じさせられるわけである。

しかし、近年の高校生の行動のスタイルを見ていると、勉強はもとより部活動や友人関係にいたるまで、なるほどスマートさは目につくが、かつて見られた競争心むき出しのがむしゃらさとか、ひたむきさが消えているようである。大学入試や受験体制も、かつては重々しく厳然と目の前に立ちふさがっているかのようであった。だが、今や、教育の多様化の潮流の中で、高校・大学の入試制度の改革が相次いでいる。さまざまな受験システムが工夫され、大学へのバイパスルートも確立してきた。大学入試のアプローチの仕方1つをとっても、このように様変わりである。

さらに、社会的な少子化傾向が続き、経済的にさほどの不自由さを感じることもなく育ってきた高校生自身にとって、このような受験環境の中では、高い学歴を求めてあくせくと受験競争に駆り立てられる必要も感じず、

また等身大の生き方を求める限り、ストイックな学校生活も望まないであろう。

ただ、現実の高校入試では、学力偏差値の序列化による輪切り選抜が行われてきたことも確かである。そのために子どもたちは小学生の頃から、より高い偏差値を獲得する競争へと動機づけられてきた。そうした偏差値競争では、ライバルは友だちが相手というよりも、むしろ自分自身の目標とする“偏差値”と格闘するという、ミクロな競争になりがちなのは自然である。そして、偏差値という客観的な数値の自明性によって、優劣の差は歴然とし、小・中学校の早い教育段階ですでに勝負はついてしまうことになる。高校間格差は、まさにこうした偏差値序列を公然と顕在化させ、中・高校生たちに将来の職業や社会的地位の展望を含めて、自己の進路選択を自明なものとして甘受させているのではないだろうか。いうならば、皮肉なことに、鬱々たる感情で生徒や親を学歴獲得のために駆り立ててきたあの受験のための熱気が、逆説的に進学競争意識を過熱させるというよりは、どちらかといえば冷却(クーリングアウト)させることに結果してきたのではないだろうか。

一方、日本の学校教育や教育現場の教師の指導(教育指導)には、従来から続いてきた学歴獲得のための競争に見合った超難関校へ

の進学熱を増幅させたり、有名校主義に陥る教育姿勢を転換し、払拭しきれてはいないようである。学校の校風や行事などを含めた教育活動全般が、このような傾向に拍車をかけてきたこともあろう。また、「学歴」とか「有名校」というように、世間一般にわかりやすい形で学校や教師の教育指導や力量の評価を求める安易さが手伝ってきたことも否めない。

そうした点で、学校における生徒の競争心や競争観というようなものが、学校活動や教師の教育活動とどのように結びつき、影響を受けているのかを調べてみることは、新たな教育の方向を探る上でも重要であろう。そのような知見を手掛かりに、教育現場における問題点についても若干述べておきたい。

## 1. 学校の特徴と生徒の競争心

本調査の対象となった高校は4校である。4校の地理歴史的な概要並びに教育の特徴、生徒の属性については、前章でかなり詳しく報告されている。前章の表1-1にみるように、4校はそれぞれが異なる校風や歴史、そして教育的な特色を有している。一部データを補って再掲することになるが、表2-1、図2-1に4校の学校の特徴に関する生徒の評価の結果を図表で示した。これからわか

るように、A校、B校、C校はいずれも8割以上の生徒が自校を「受験指導に力を入れている」と評価するいわゆる受験校であるといえてよい。特にA校は生徒の9割以上が受験校であると答えている。D校だけは大学併設の高校なので、受験意識が低いのもかもしれない。ちなみに、表2-2に4校の生徒の将来の進路希望を示した。短大・大学を希望する生徒は、B校が最も多い。次いで、A校、

表2-1 学校の特徴

	(%)				
	全体	A校	B校	C校	D校
受験指導に力を入れている	82.0	93.2	82.8	82.6	64.7
クラブ・部活動が盛ん	75.8	46.8	86.0	96.7	65.0
自由な雰囲気満ちている	51.8	14.4	83.5	17.0	24.6
校則や生活指導がきびしい	39.5	64.0	13.9	82.2	58.7
学校行事が盛ん	39.5	33.6	47.1	46.7	17.4
先生と生徒の関係がよい	35.2	25.6	39.0	36.5	34.1
クラス間の対抗意識が強い	12.4	10.8	11.2	21.6	11.7
就職指導に力を入れている	9.0	6.8	2.5	27.8	18.9

「そう思う」割合 ○は最大値



D校、C校の順である。教師-生徒関係が4校中で一番良好なのは、最も自由な雰囲気に満ち、学校行事が盛んなB校である。また、

クラス間の対抗意識が比較的強いのは、クラブ・部活動が最も盛んなC校である。

図2-1 学校の特徴

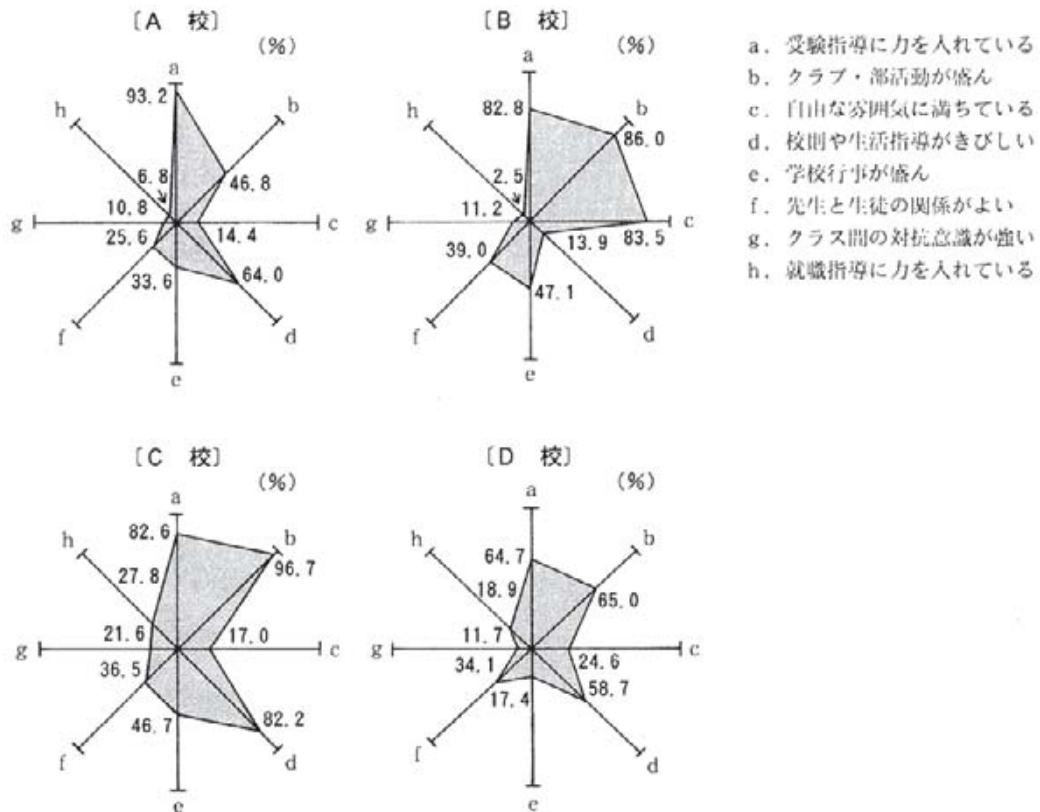


表2-2 将来の進路

	全体	A校	B校	C校	D校
高校まで	1.6	2.1	0.8	4.1	1.8
専門学校まで	6.0	3.8	4.3	15.4	7.2
短大まで	4.2	4.9	4.1	6.6	2.1
大学以上	70.1	70.8	75.6	51.5	65.0
わからない	16.3	18.4	12.2	21.2	23.1

このような各校の特色が、生徒の属性とどのように関連しているのかをまずみておきたい。表2-3は、学校・性別の部活動への参加状況をみたものである。運動部に熱心なのは、男女ともC校、D校であるが、とりわけC校の男子の熱心さが注目される（男子：C校68.0% > D校58.6% > B校35.7% > A校25.4%）。A校、B校には、途中で退部をしたり、はじめから入部をしない生徒が比較的多いようである。そこで部活動の参加状況と学業成績の関連をみておく。表2-4から、成績が下位にあっても部活動に熱心なのは、文化部よりも運動部の生徒の方である（運動部熱心＝中の下26.1%、下21.1% > 文化部熱心＝中の下21.9%、下14.5%）。学校生活において、学業ではかなわなくても運動部の部活動にかける情熱は人一倍強く持っているようである。

次に、学校生活への満足度を比較したものが図2-2である。一目してわかるように、B校の生徒が示す学校への肯定的な満足度は他の3校よりはるかに高い（とても満足+や

や満足＝B校42.6% > D校20.1% > C校19.5% > A校17.6%）。こうした傾向は、B校の特色が自由な雰囲気満ちて、校則や生活指導に重点が置かれることなく、先生と生徒の相互の関係が極めて良好な点からもうかがえよう。一方、学校生活への満足度が最も低いA校は、最も受験指導に力を入れているとみられている学校である。しかも生徒の規律面での指導が重視され、どちらかというと自由な雰囲気に欠ける傾向の強い学校であると言えよう。C校は部活動に学校全体で力を入れており、生徒の方でもそれに熱心に答えているようである。しかし、学校満足度はそれほど高くはない。D校の場合は、のんびりした中高一貫の私立校であり、学校生活にそこそこ満足を示す生徒がいる反面、不満を抱いている層も半数以上いるという特徴がみられる。生徒が示した学校生活への満足度の結果からは、学校側の教育指導に対して、生徒は必ずしもそれに答えていないということがわかった。

表2-3 部活動の参加状況

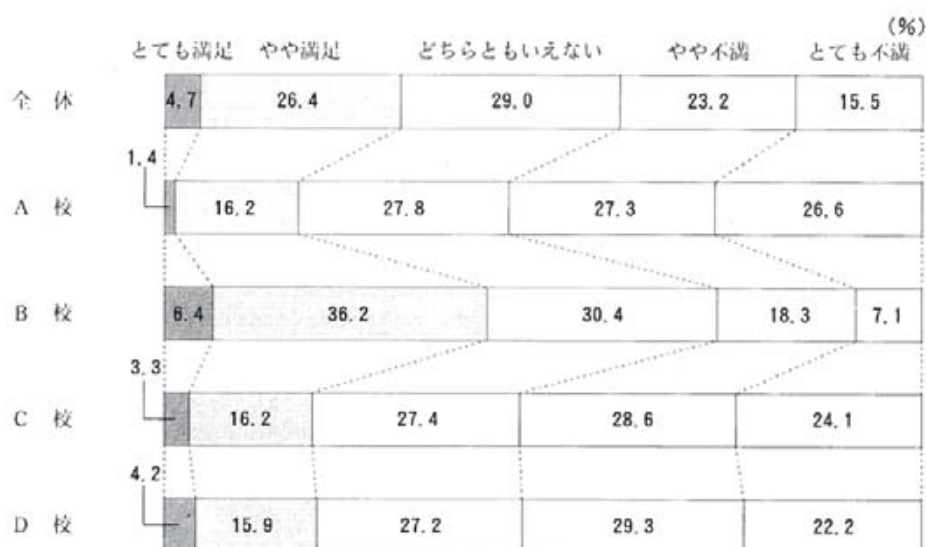
		(%)									
		全体	A校		B校		C校		D校		
			男子	女子	男子	女子	男子	女子	男子	女子	
運動部	熱心	32.3	25.4	20.5	35.7	19.3	68.0	30.7	58.6	36.2	
	あまり熱心でない	11.4	10.4	11.4	6.8	7.7	17.2	16.7	17.8	24.1	
文化部	熱心	11.8	3.6	7.0	9.1	19.1	4.9	16.7	7.6	18.4	
	あまり熱心でない	7.6	4.7	7.4	3.4	11.8	5.7	24.6	1.9	8.0	
以前は参加していた		17.1	25.4	19.7	23.1	18.7	1.6	8.8	6.4	8.6	
参加したことはない		18.7	30.1	33.2	20.6	22.5	2.5	-	6.4	4.0	

○は最大値

表 2 - 4 部活動 × 成績

		(%)				
		上	中の上	中	中の下	下
運動部	熱心	3.5	20.0	28.2	26.1	21.1
	あまり熱心でない	3.0	24.3	25.5	19.6	26.4
文化部	熱心	2.9	23.1	36.0	21.9	14.5
	あまり熱心でない	4.5	21.0	31.2	28.0	10.8
以前は参加していた		3.4	26.4	29.8	21.9	17.0
参加したことはない		5.7	27.9	32.6	19.0	12.8

図 2 - 2 学校生活への満足度



では、こうした学校と生徒の関係から、生徒の競争心の強さはどうか。図2-3は、「人と競争するのが好きか」を5段階で答えてもらった結果を、4校で比較したグラフである。この結果からは、部活動に力を入れているC校の生徒の競争心の強さが4校中でトップであり、回答した生徒の約3分の1が人と競争を好む傾向があることがわかった（とても好き13.7%、やや好き20.7%）。その一方、最も受験指導に力を入れているA校は、逆に人と競争を好む生徒の割合はおよそ4分の1程度であり、嫌いと答えた生徒の方が多いことも知れる（とても好き+やや好き=26.4%<とても嫌い+やや嫌い=33.0%）。また、受験校ではあるが自由な校風で、教師-生徒関係も好評価のB校は、

C校ほど競争心の強い生徒がいなければ、またA校ほどには競争忌避の生徒もいないようである。人との競争が嫌いという点では、中高一貫教育でのんびりした校風のD校が最も忌避の割合が高い結果が示された。

では、同級生や友人などの相手に対するライバル感情とか競争心についてはどうかと思い、表2-5に示した11のタイプについて、同じクラスの仲間にとらどう思うかを聞いてみた。表は「とてもいい」と答えた割合を示している。全体としては、1. 運動部のレギュラー（51.6%）、2. 無遅刻、無欠席、無早退の人（46.4%）、3. 趣味に熱心な人（39.0%）の順に好かれている一方、成績優秀な者とか生徒会役員などの割合は、それほど上位になっていない。

図2-3 人と競争するのが好きか

	(%)				
	とても好き	やや好き	どちらともいえない	やや嫌い	とても嫌い
全体	6.8	22.8	37.9	17.7	13.1
A校	4.5	21.9	40.7	17.9	15.1
B校	6.4	24.3	36.6	18.0	11.8
C校	13.7	20.7	38.2	14.9	11.6
D校	6.0	21.0	38.0	18.6	15.6

学校別にみて、各項目に関して学校間でトップの項目に注目すると、C校に比較的多く集まっているのがわかる。「運動部のレギュラー」はもとより、「ボランティア」「流行に敏感」「生徒会の役員」「アルバイト」「先生に気に入られる」ような生徒たちである。このようにC校では学校生活の中で生徒が単に勉強のことだけでなく、いろいろな面に関心をもって、それだけいっそう競争心を刺激される機会も多いのかもしれない。

B校は学区でトップランクの進学校であり、生徒は「成績が学年のトップクラスの人」と同じクラスになることで勉強に対する刺激を与えられたり、クラスの勉学的な雰囲気が向上することを望める有利な面を日頃から感じ

ているのであろう。

D校では「無遅刻、無欠席、無早退の人」とか「自分の趣味に熱心な人」というような、謹厳実直でコツコツ自分の趣味に没頭するというあまり派手さのないタイプの生徒に好感を寄せる割合が高いようであるが、D校のもつ落ち着いたのんびりした雰囲気が生徒のこうした意識にも反映しているのかもしれない。

最後にA校についてふれておくと、学校が厳しい受験指導の体制をとっているようだが、「成績」とか「生徒会役員」に関する項目への好感度は低い。生徒自身が受験や生徒会といった向学校的なものに価値を見いだせていないのかもしれない。

表2-5 クラスに次のような人がいたらどう思うか

	全体	A校	B校	C校	D校
運動部のレギュラーで活躍している人	51.6	50.4	50.4	58.1	52.4
無遅刻、無欠席、無早退の人	46.4	47.1	43.1	47.7	55.1
自分の趣味に熱心な人	39.0	41.2	35.8	39.8	45.8
ボランティア活動をしている人	35.7	35.8	34.3	41.9	35.6
成績が学年のトップクラスの人	34.0	29.6	37.0	36.1	28.7
いろいろな流行に敏感な人	22.6	22.4	21.2	32.0	21.0
生徒会の役員	18.2	9.2	18.3	30.7	20.1
アルバイトをよくする人	15.3	13.2	14.3	23.2	15.3
多くの先生に気に入られている人	9.5	7.3	8.8	17.8	8.4
いつも本を読んでいる人	8.1	6.1	9.3	10.4	5.1
つっぱりグループの一員	7.1	5.9	7.8	6.6	6.9

「とてもいい」割合  
○は最大値

## 2. 教師の教育指導と競争観

学校の特徴によって、生徒の競争意識の表れ方に違いがかなりみられた。しかし、同じ学校の中でも教師は皆まったく同じように振る舞っているわけではない。教師には一定の教育の自由が与えられており、たとえ同じことを生徒に伝える場合にも、個々の教師によって発言のニュアンスや伝達の仕方などの違いがある。生徒の受け止め方にもおのずと違いがみられよう。そのことによる生徒への影響度や効果もまた異なってくる。そこで次に、生徒との直接的なやり取りの中で、先生

の行動が生徒の競争観の形成にどのようにかわっているのかをみてみたい。

まず表2-6は、日頃先生が生徒に対し、授業やホームルームなどの場面で発言したり行動したりしている内容を10項目に分けて、その頻度について3段階で尋ねた結果である。表は、「よくある」と答えた割合を示している。全体的には、先生が生徒に対して「受験の話題」(72.4%)や「成績上位者の名前の公表」(71.9%)などのことはよくやられているようであり、7割を超えている。また、

表2-6 先生の行動

	(%)				
	全 体	A 校	B 校	C 校	D 校
受験のことをよく話題にする	72.4	82.6	77.3	66.4	48.5
成績上位者の名前を公表する	71.9	80.2	67.5	73.4	74.3
受験は自分との戦いであると言う	41.1	57.6	41.8	44.0	15.9
今の生徒を昔の生徒と比較する	27.6	33.6	22.0	44.4	25.7
他校の生徒に勉強で負けないようにと言う	23.2	19.5	26.4	41.9	4.2
成績のよい生徒をよく指す	15.9	19.3	14.7	17.0	14.4
他校の生徒に部活動(スポーツ)で負けないようにと言う	14.1	9.6	8.1	50.6	12.3
人間の生き方について話す	11.6	6.6	5.6	22.0	29.3
成績の落ちた生徒を励ます	6.0	7.8	5.8	7.5	3.6
ボランティア活動をすすめる	5.2	11.8	0.7	6.2	10.2

「よくある」割合  
○は最大値

「受験は自分との戦いである」(41.1%)という言葉を先生からよく聞かされている生徒も4割いる。

学校別でみていくと、こうした受験勉強を鼓舞するような行動の項目は、A校の先生に多く特徴づけられる。また、C校の先生には、生徒に向かって今と昔の生徒の善し悪しの比較をしたり、勉強やスポーツなどで他校と生徒を張り合わせるような気持ちにさせていることが多いこともわかる。いずれをとっても、教育指導の上では生徒の競争心を引き出す方法としてしばしば見かけられるものである。場面によっては、経験的にも競争心をあおる相応に強力な効果も期待できそうである。ところでD校の先生には、このような競争をあおるような接し方は少ないようである。むしろ、

「人間の生き方について話す」(29.3%)ことが、他の3校の先生に比較して相対的に多く、注目される。

こうした先生の行動と生徒の競争心の関連をみたのが表2-7である。競争意識をあおるような先生の行動が、實際上、生徒自身の仲間に対するライバル意識や競争観にどのようなつながってくるのかをみようとするものである。これをみると、先生から受験の話をよく聞かされたり、他校の生徒に勉強で負けるなど叱咤激励されている生徒ほど、クラスの中に運動部のレギュラーで活躍する者や学年で成績がトップクラスのような、卓越した能力をもつ者がいてくれることへの好感度が強い。

表2-7 先生の行動 × クラスにいたら「とてもいい」と思う人

		(%)						
		運動部のレギュラーで活躍している人	無遅刻、無欠席、無早退の人	自分の趣味に熱心な人	ボランティア活動をしている人	成績が学年のトップクラスの人	いろいろな流行に敏感な人	生徒会の役員
受験のことをよく話題にする	よくある	54.7	47.0	38.8	37.0	34.9	23.3	18.0
	ときどきある	44.1	45.2	39.3	32.2	32.8	20.1	18.6
	ない	44.8	45.6	40.5	34.2	24.1	25.3	16.5
他校の生徒に勉強で負けないようにと言う	よくある	54.9	44.4	40.5	40.9	38.2	26.6	17.8
	ときどきある	51.3	45.0	37.1	34.2	33.6	21.1	17.5
	ない	49.9	49.4	40.2	34.0	31.8	21.8	19.3
他校の生徒に部活動で負けないようにと言う	よくある	60.0	53.4	45.2	40.0	36.2	34.5	25.2
	ときどきある	52.3	46.0	38.8	36.3	35.8	23.4	17.4
	ない	49.4	44.9	37.7	34.2	32.6	19.5	16.8

クラスにいたら「とてもいい」割合 ○は最大値

そこでさらに、受験競争や部活動に参加する意義や目的意識に関しての両極的な考え方もつ生徒とのクロスをみたのが表2-8である。表の結果をまとめると、受験競争は他人との競争であると強く思っている生徒ほど、他校の生徒に勉強で負けるなど先生から普段言われていることが多いようである。優勝劣敗の闘争意欲を駆り立てられている生徒ほど、受験競争は自分との戦いであり、部活動も勝つために努力をしてこそ、充実感があると考えている。言うならば、自己を鍛練し、克己するものという意味づけを競争的な行為に見いだしているようである。

こうしてみると、教師の取る行動が生徒の競争観の形成に少なからず影響を与えていることがうかがえる。しかも、生徒の一元的で、利己的な競争観の形成に、学校文化や教師の教育指導が果たしている役割も大きいと言わざるをえない。そうした競争観に対置されるべき今後の教育の方向としては、共生的な考え方を育む教育指導の可能性を探るこ

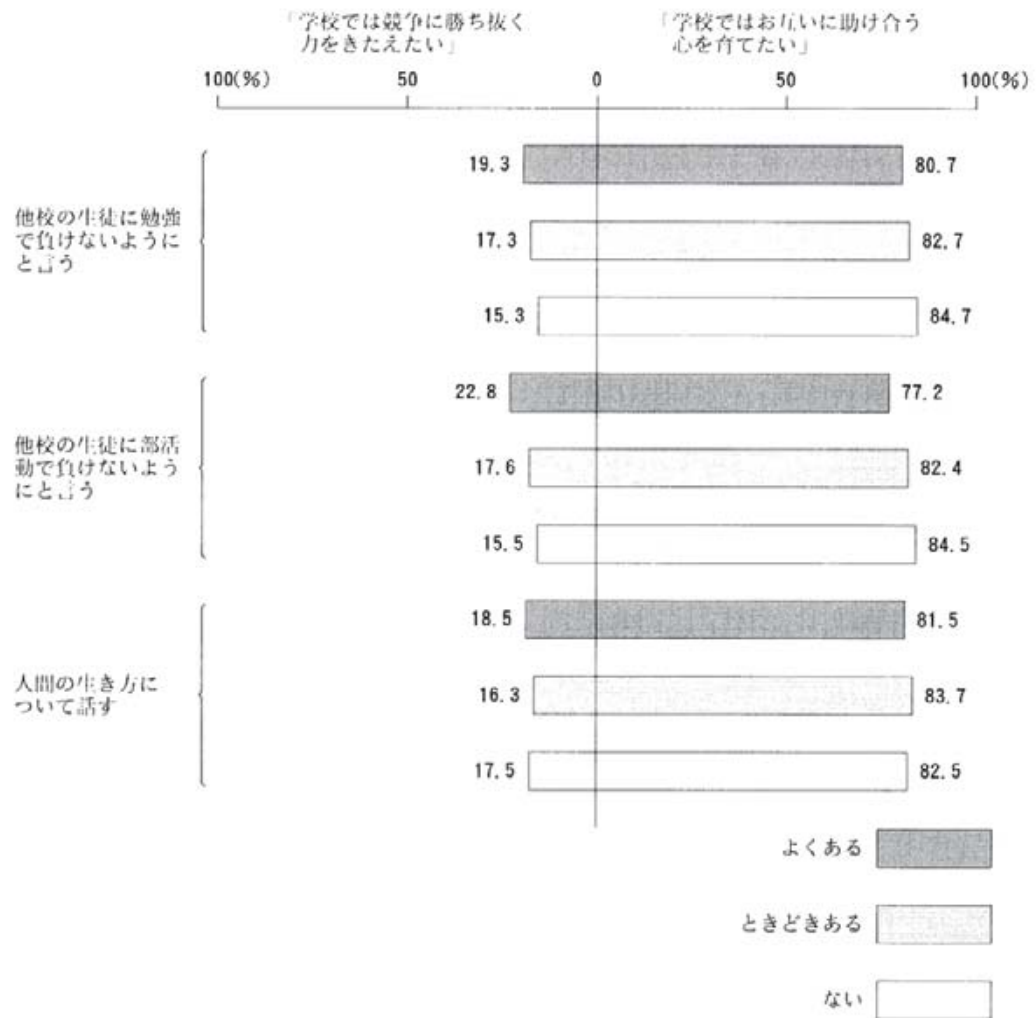
とも必要とされよう。こうした観点から、ささやかな手掛かりとして図2-4で、先生の行動の仕方が、生徒が学校を競争の場としてみるのか、それとも共生の場としてみるのか、そうした見方にどうかかわってくるのかをみておきたい。図からは総じて、学校を共生的な心を育てる場であるべきとする見方の方が高校生に大いに支持されているのは、救われた気持ちである。限られたデータの中であえて言うならば、他の高校生との勉強や部活動でのライバル意識を強化させる教師の指導のあり方よりも、例えば人間の生き方について生徒に語りかけるような指導のあり方の方が、少なくとも共生的な心を学校教育の中で育てることに寄与できるのではないだろうか（「学校ではお互いに助け合う心を育てたい」先生はよく人間の生き方について話す81.5% > 他校の生徒に勉強で負けたくないと言う80.7% > 他校の生徒に部活動で負けたくないと言う77.2%「よくある」割合）。

表2-8 先生の行動 × 競争観

		受験競争は		部活動は	
		他人との競争	自分との戦い	勝つために努力	楽しくやる
受験のことをよく話題にする	よくある	26.7	73.3	30.1	69.9
	ときどきある	27.6	72.4	33.1	66.9
	ない	21.5	78.5	38.0	62.0
他校の生徒に勉強で負けたくないと言う	よくある	30.2	69.8	32.1	67.9
	ときどきある	26.9	73.1	31.3	68.7
	ない	24.9	75.1	30.3	69.7
他校の生徒に部活動で負けたくないと言う	よくある	20.3	79.7	47.6	52.4
	ときどきある	25.6	74.4	33.9	66.1
	ない	29.3	70.7	25.6	74.4



図 2-4 先生の行動 × 競争・共生・努力観



### 3. 教育現場と競争的指導観

競争心が個人間の個性の多様性を暗黙に認め合いながら、その個性の違いを競い合うものであれば、教育の指導原理の観点からもそれなりの意味をもつべきものと言えよう。しかし、これまでの日本の学校教育が招いてきた病理として、教育の画一化や「学校歴」意識と並んで日本的競争の特質、つまり「外目には激しい競争の背後に、実態としては競争回避心理が働いている」という指摘がある。日本のおとな社会がもつ組織や集団への同調志向性が、社会人になると個人競争を回避させ、組織との協調を前提とした同調競争という欧米社会とは異質な原理に立った競争をもたらしている。それゆえ、「大人の社会が競争を避ける分だけ、子どもの世界が競争を肩代わりしていて、それが今日の日本の教育病理のもう一つの態様を示している。」という（第14期中央教育審議会答申、『新しい時代に対応する教育の諸制度の改革』、文部省、平成3年5月刊行、p.15～16）。

このように日本の子どもたちは、18歳にい

たる学校教育まではきびしい競争にさらされている。しかもきわめて利己的・個人的欲求につき動かされた社会的地位をめぐる獲得競争のフィールドである。一般には、学校教育にもまたこうした根強い受験志向の集団心理を背景に、より効率的な受験準備教育が導入されてきた。さらに今日では、受験競争に乗り遅れたり、受験志向とは別の野心をもつ生徒には、部活動の中での同様のきびしい競争を通して、将来のプロ（選手）への道をめぐる競争が用意されてもいる。つまり、学校文化の中に、このような日本的競争の特質を保持しながら、競争心を梃子にした教育指導を行ってきた側面があるのではないだろうか。だとすれば、そうした学校文化の特質や教育指導のもとで学校生活を過ごす生徒の意識形成を、これからの社会で求められる資質と重ねながら、将来の人格の形成にどのような意味をもつものなのかを批判的に検討する余地がある。そして、競争観とは異なる指導原理の視点を、さらに探っていく必要がある。

## 第3章

# 友人関係と競争観

本章では、クラスの友人関係、クラスメートとの競争心などにスポットをあて、現代高

校生の競争観を明らかにする。

## 1. 推薦入学をめぐる競争

十数年前の新聞に、一流高校・大学をめざして早くから塾通いをし、苛烈な受験戦争の中に身をおく小学生たちを描いているものがあった。記事中、記者が塾でトップの子どもにインタビューをする。

記者「そんなに勉強ができると、みんなから教えてと言われない？」

子ども「どうして教えなきゃいけないの？」

そんなことをしたら、みんなに追いつかれちゃうじゃないか」

このような子どもが、日本のエリートになっていくかと思うと、ぞっとした記憶がある。その記事は、当時の過熱した受験競争の雰囲気をよく伝えていた。競争の中でライバルを蹴落としていくのは、当時の一般的なイメージであったといっていよい。

ひるがえって、現在の高校生たちの様子を見てみると、大きく様変わりしたと、実感せざるをえない。

なるほど、生徒たちは今も受験戦争の中に

放りこまれ、勉強に励んでいる。しかし、そこには、ひと昔前の、熱く、そして冷徹にライバルたちを抜いていく迫力が、どうしても感じられない。

現在の大学入試の中に、私立大学の指定校推薦制度がある。大学から推薦枠（定員）を得た高校は、希望者を募り、校内の会議で推薦する生徒を決定する。この校内選考をクリアした生徒は、かなり高い確率で合格する。校内選考では、3年の1学期までの成績が選考材料とされるため、“推薦ねらい”の生徒の3年1学期の勉強ぶりと得点への執念は、相当のものである。答案が返却されると、生徒は微妙な採点を指摘し、1点でも点数を上げようと、教師に食い下がる。これをみると、今でも受験競争の熱気は健在であるようにみえる。が、2学期になると、生徒の行動・姿勢に大きな変化がみられる。あれほど1点にこだわった生徒たちだから、何が何でも各々の志望校へチャレンジするものと、こちらは

思っている。ところが、生徒たちは、あっさり志望校を変えたり、推薦への応募をあきらめてしまう。生徒に理由を尋ねると、「〇〇大学には、私より点の高い人が希望を出すからやめました」という。生徒は、独自のネットワークを駆使して情報を集め、出願校がかちあわないよう“事前調整”をしてしまう。とにかく、何かを恐れているかのように、生徒は他の生徒と希望がかちあうことを避けようとする。結果として、生徒は人のテリトリーを荒さず、見事に住み分けてしまう。

## 2. クラスの友人関係

まず、生徒たちのクラス内の人間関係をみていこう。表3-1は「あなたにとって、次のような人は、今のクラスにいますか」と尋ねた結果である。

全般的に、生徒の友人関係は一応良好のようにみえる。「気軽に話ができる友人」は、6割が「何人も」おり、「いない」生徒は3%強にすぎない。「それなりに合わせていける人」のいる割合も大きい。「一緒に行動する友人」も95.0%がもっている。「自分と対立している人」も4分の3が「いない」と答えている。多くの生徒は、日常つき合う友人に不自由していない。

しかし、その友人関係がどれほど深いものか、と視点を変すと、やや違った側面もみえてくる。「気軽に話せる友人」が「いない」生徒は数%だけだが、「何でも話せる友人」となると、5人に1人は「いない」としている。また、8割近い生徒が「心を許せない人」をクラス内に抱えている。そこそこに友人はいるものの、つき合いは軽く浅いもので、いかにも現代的な高校生の交友関係の特徴が、浮かび上がっている。

競争相手（ライバル）はどうであろうか。「勉強上のライバル」が「何人も」あるいは「数人」いる者が44.2%、「スポーツ上のライ

受験生の志望校選びが、「入りたい大学」から「入れる大学」へと変化してきたことが指摘されて久しい。推薦入学にかかわるこのような情景は、この傾向の縮図である。

本章では学校・クラスの友人関係に焦点を絞って、様変わりした生徒の友人関係の実態、クラスメートとの競争意識はどの面で、どの程度あるのか等を考察していく。さらに、それらの背景にあると思われる親の期待などとの関連にも触れていきたい。

「ライバル」が「いる」者は27.7%にとどまる。この数値の解釈には微妙なものもあるが、もう少し、「〇〇君には負けたくない」といった覇気がほしいように思える。

さて、見逃せないのが、「自分をからかったり、いじめたりする人」「自分を使い走りなどに利用しようとする人」がいるかの結果である。どちらも、10%前後の生徒が「いる」と答えている（この両者はかなり重なり合うであろう）。

この数値は十分すぎるほど高い。実際はそんなに大したことではなく、ちょっとした悪ふざけなどをかなり含んでいるのでは、と考えられる読者もいよう。しかし、「いじめ」は、教師が客観的に認知するものではない。その生徒が「いじめられた」と感じたならば、それはもう「いじめ」である。

一般に「いじめ」は教師から見えにくい。特に、生徒との接触が相対的に少ない進学校ではなおさらである。事態が相当悪化してから発覚し、意外なメンバーが加害者であることが明らかになり、担任としてあ然とすることもある。とにかく教師は、表3-1の10、11の結果を他校のこととは考えず、もう一度、自分が担当する生徒たちを、きめ細かく見直す必要がある。

表3-1 クラスメートについて

(%)

	何人もいる	少しいる	いない	不明
1. 気軽に話ができる友人	60.5	35.4	3.4	0.7
2. それなりに合わせていける人	55.2	41.7	2.2	0.9
3. 一緒に行動する友人	42.9	52.1	4.1	0.9
4. たまたま同じクラスという感じの人	37.6	54.2	7.3	0.9
5. 心を許せない人	19.9	55.6	23.8	0.7
6. 何でも話せる友人	19.0	60.6	19.2	1.2
7. 勉強上のライバル	8.0	36.2	55.2	0.6
8. スポーツ上のライバル	6.7	21.0	71.7	0.6
9. 自分と対立している人	4.5	18.8	75.7	1.0
10. 自分をからかったり、いじめたりする人	2.8	10.8	85.7	0.7
11. 自分を使い走りなどに利用しようとする人	1.9	7.9	89.5	0.7

### 3. クラスメートとの共生の可能性

表3-1によれば、生徒は、深い友情とはいえないまでも、それなりの友人関係をもっている。そして、クラスメートを、勉強・スポーツのライバルとはそれほど思っておらず、クラスメートを“競争”という視点からみる傾向はあまり強くない。

それでは“共生”はどうであろうか。生徒たちはどのようなキャラクターをクラスメートとして受容するのか、「クラスに次のような人がいたら、どう思いますか」という形で探ってみよう。結果を表3-2に示した。

半数以上の生徒が「とても」あるいは「少しいい」と感じるのは、「運動部のレギュ

ラーで活躍している人」「無遅刻、無欠席、無早退の人」など5項目あり、「流行に敏感な人」もほぼ5割である。逆に「少し・とてもいやだ」は、「つっぱりグループの一員」42.9%で、5割に達する項目はない。全体的にみると、拒絶の数値は低く、生徒はかなり広い許容度をもっているように見える。ただ、表3-2からもう1つ見て取れるのは、「どちらともいえない」の数値の高さである。「運動部のレギュラーで活躍している人」を除く10項目で、3～6割の生徒が選択している。受け入れてよいといっても、積極的歓迎とはいかない層が、確実にかなりの割合で存

表3-2 次のような人がクラスにいたらどう思うか

	(%)					
	とてもいい	少しいい	どちらともいえない	少しいやだ	とてもいやだ	不明
1. 運動部のレギュラーで活躍している人	51.6	22.4	23.8	0.9	0.7	0.6
2. 無遅刻、無欠席、無早退の人	46.4	14.6	32.1	3.6	2.7	0.6
3. 自分の趣味に熱心な人	39.0	27.0	29.8	2.2	1.5	0.5
4. ボランティア活動をしている人	35.7	22.8	35.3	2.4	3.1	0.7
5. 成績が学年のトップクラスの人	34.0	20.9	35.2	5.2	4.0	0.7
6. いろいろな流行に敏感な人	22.6	26.3	38.4	8.5	3.4	0.8
7. 生徒会の役員	18.2	20.3	50.1	6.0	4.9	0.5
8. アルバイトをよくする人	15.3	19.7	59.4	3.1	1.9	0.6
9. 多くの先生に気に入られている人	9.5	12.1	53.4	15.0	9.4	0.6
10. いつも本を読んでいる人	8.1	9.6	48.0	22.4	11.4	0.5
11. つっぱりグループの一員	7.1	6.1	43.1	18.5	24.4	0.8

在する。

表3-2からは、かなり幅広いキャラクターを生徒はクラスメートとして受け入れ可能であることがわかる。しかし、それは、「ぜひそういう人と、同じクラスで過ごしたい」というほどではない。「まあ、自分に迷

惑が及ばないなら、いてもいい」といった方が、生徒の意識の大勢に近いであろう。

生徒の共生の許容度はかなり広いものの、それは自分の領域を侵さない範囲に限る、とまとめられるであろう。

## 4. 友人関係の満足度と競争

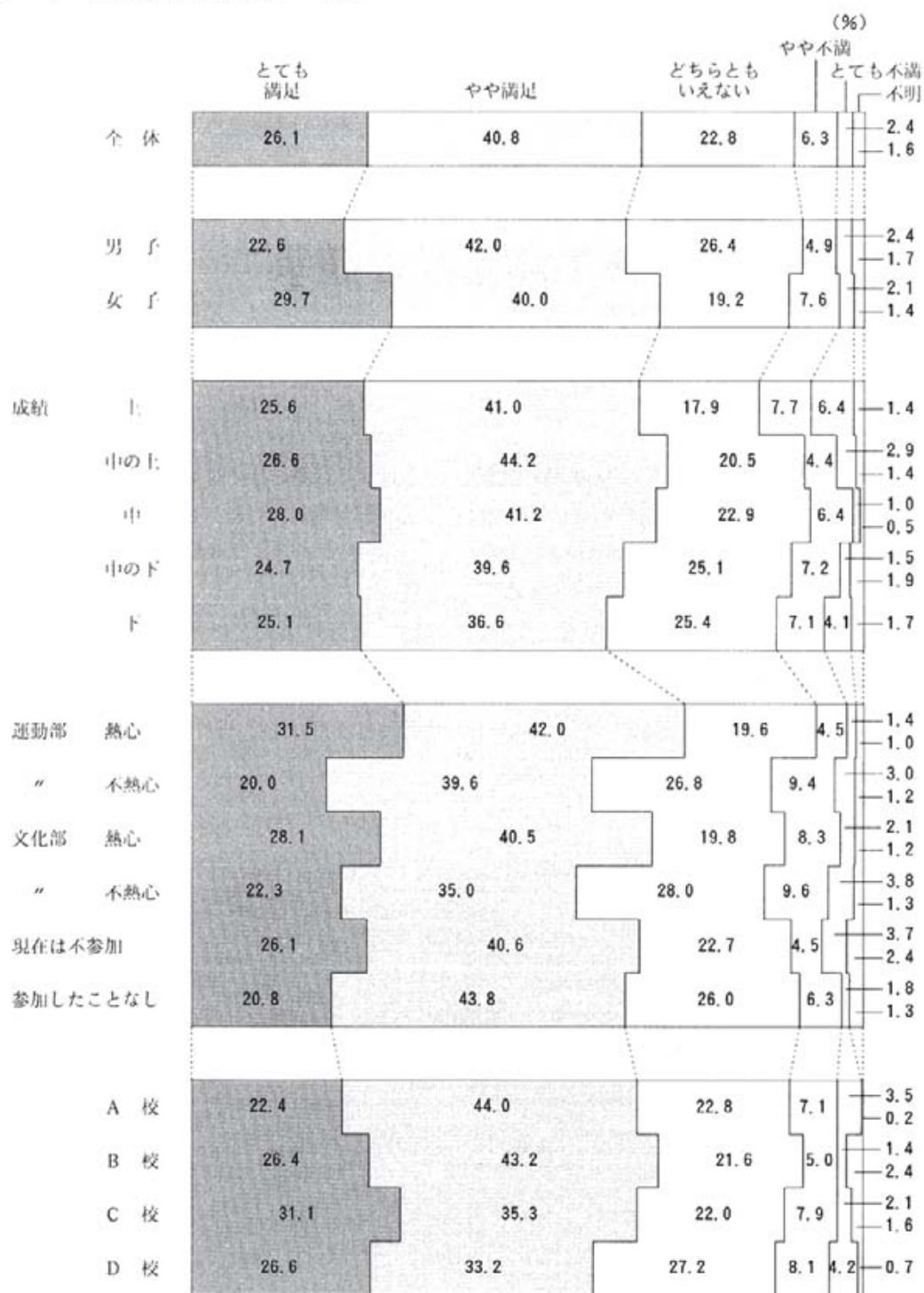
さてそれでは、生徒たちは、現在の友人関係にどのくらい満足しているのでしょうか。

図3-1に結果をまとめた。

全体では、生徒の66.9%が現在の友人関係に「とても」あるいは「やや満足」しており、「不満」層は1割弱である。性別では、女子の方がやや満足度が高い。成績別では、上位

の不満が若干高いものの、総じて差は少ない。部活動では、「熱心に参加している」生徒の満足度が、やはり高くなっている。学校別では、部活動の盛んなC校の「とても満足」が3割を超している。校風や、学校の指導体制、教師の姿勢などが影響を及ぼしている。

図3-1 友人関係の満足度 × 属性





この満足度と競争意識との関連をみたのが、**図3-2**である。

友人関係への満足度が中間（「どちらともいえない」）の生徒に、競争好きが少ない（23.2%）のが注目される。それは友人関係に満足している生徒や、不満な生徒は、人間関係をつくろうと、周囲に積極的に働きかけているであろう。その結果が、満足や不満につながる。これに対し、「どちらともいえない」を選択した生徒は、交友関係をあまり重視していないのではないか。人間関係に興味の少ない生徒が、人との競争を好まないのは当然といえよう。

また、友人関係に満足している生徒に、競争好きが比較的多い点にも、留意しておきたい。競争好きは、ライバル、クラスメートの排除にはつながらず、むしろ積極的に競争相手を求めることで交友を深めているようである。

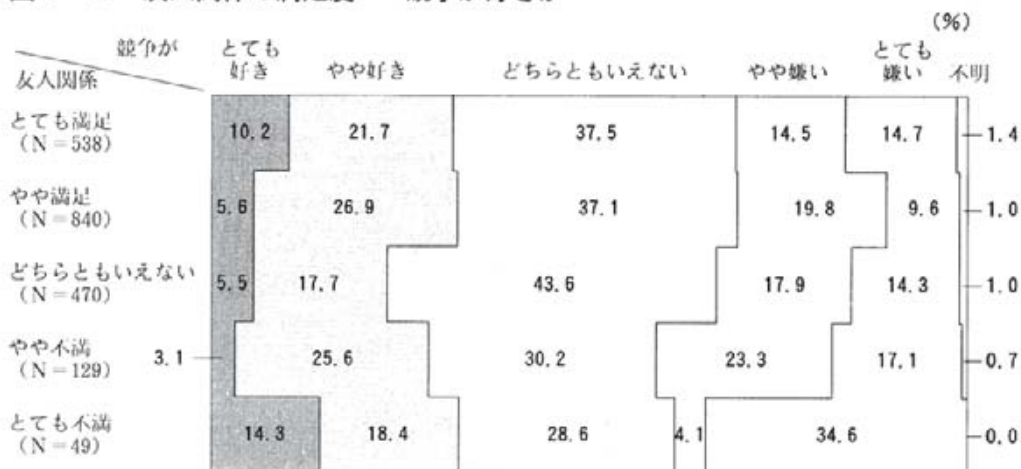
ここまでのデータからは、生徒の競争への指向、共生への指向ともに、“そこそこ”という印象を受ける。では、ストレートに生徒の競争心を探ねると、彼らはどう反応するのだろうか。「クラスの人と、次の点で張り合ったり、負けたくないと思うか」と、質問した結果が**表3-3**である。

全体として、「かなりそう」の数値が相当

低い。1～3の項目でも、20%をようやく超える程度である。反対に「そうでない」の数値は概して高く、9項目で50%以上である。少なくとも、若者のほとぼしるような競争心は、データからは全く感じられない。皆マイペースという印象である。そして、「友人へのやさしさ、思いやり」がトップにきている点も注目すべきだろう。現代青少年の「やさしさ指向」といってしまえば簡単だが、「やさしさ」や「思いやり」は、本来“競争”にはなじまず、むしろ“共生”を支える大きな要素である。その項目が、勉強・テスト関係の項目とほぼ同じ数値を得ていることは、象徴的である。とにかく、高校生たちの競争心は全般に低調である。

それでは、特定の場面を設定し、競争か共生か二者択一式で尋ねてみよう。**図3-3**をみていただきたい。左に共生的な選択肢を、右に競争的な選択肢を配した。「テストの学年順位」や「異性に人気」では、共生的な選択肢が競争のそれを大きく上回る。しかし、「同じ人を好きになった」では、競争派が多くなる。「レギュラーの座」「推薦入学・就職先が勝ち合う」では、競争を選ぶ生徒が8割前後に達する。自分の利害が大きくかわる場合、敗れたときの精神的衝撃が大きい場合になると、さすがに生徒は競争心を示す。

**図3-2 友人関係の満足度 × 競争が好きか**



もっとも、「レギュラーの座」については、多くの場合、競争以前に同学年の同じ部の部員としての信頼感・親しきがあり、共生を前提とした競争といえなくもない。「推薦・就職」も「かち合った」場合でなく、「重なりそう」といった質問であったなら、結果は全く違っていたかもしれない。

こう考えてくると、図3-3の結果も、現代高校生の競争心の乏しさ、そして、どちらかといえば、共生に向かおうとする傾向と、整合するものではないだろうか。

図3-4もさまざまな場面を仮定し、二者

択一で答えてもらったものである。特にBとDの結果に注目してほしい。個人のプレーによる勝利より、クラスで共生している仲間たちで得た勝利を生徒は選択している(B)。競争することに消極的な姿勢とみても、的はずれではないだろう。ねじり鉢巻きで、とにかく一流ブランド大学をめざす姿は、現代高校生の中にはもうあまり見られないだろうと思っていたが、予想通りの結果となった(D)。やはり、現代高校生は、マイペースでゴーイングマイウェイが主流のようである。

表3-3 クラスメイトと競争心があるか(張り合う・負けたくない)

	(%)			
	かなりそう	少しそう	そうでない	不明
1. 友人へのやさしさ、思いやり	20.7	39.4	38.5	1.4
2. 運動、スポーツの能力や記録	20.4	32.9	45.7	1.0
3. 定期テストの順位	20.1	45.9	33.1	0.9
4. 模擬試験の結果	19.7	41.8	37.5	1.0
5. 英語の成績	17.4	38.2	43.5	0.9
6. 数学の成績	17.1	34.3	47.7	0.9
7. 入る大学、短大、専門学校	13.8	29.5	55.6	1.1
8. 楽器演奏やカラオケのうまさ	12.1	31.0	55.7	1.2
9. どんな職業につくか	11.2	23.1	64.8	0.9
10. 異性に好かれるか、恋人の有無	10.9	29.8	58.3	1.0
11. 服装、ヘアスタイルのおしゃれ	9.9	34.5	54.9	0.7
12. クラスでの人気、人望	8.5	32.9	57.7	0.9
13. カバン・小物など持ち物	6.6	31.7	60.5	1.2
14. テレビゲームなどのうまさ	6.0	17.2	75.7	1.1
15. 先生に気に入られているか	1.7	18.6	78.9	0.8

図3-3 競争するか、避けるか

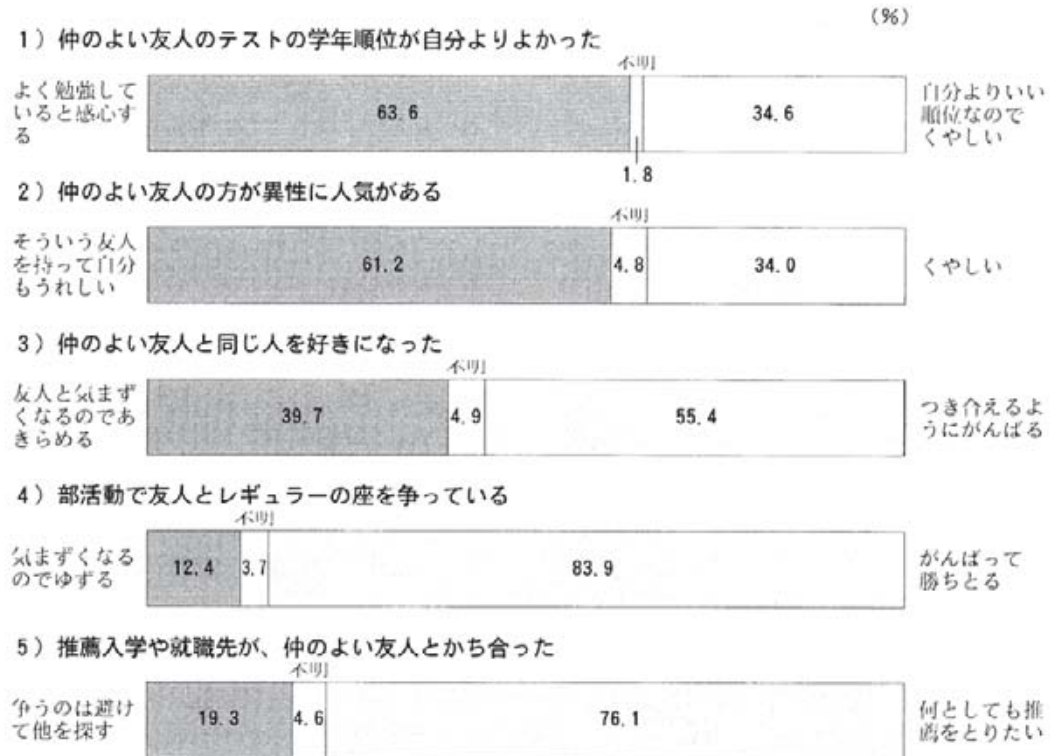
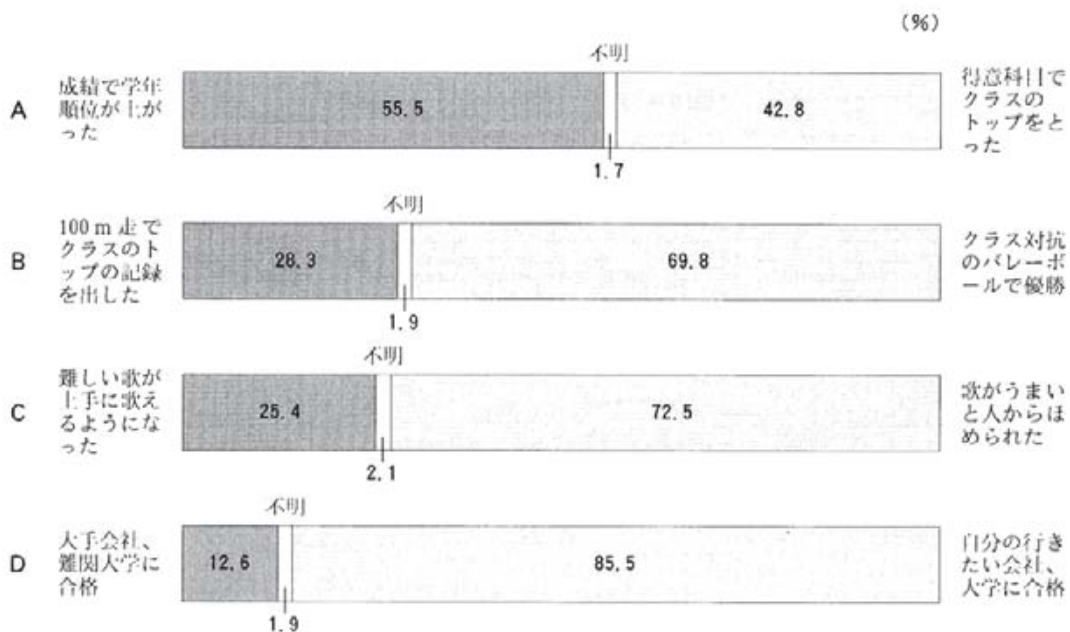


図3-4 どちらがうれしいか



## 5. 親の期待と競争観

ここまでデータを考察してきた結果、おおむね次のような傾向がみえてきた。まず、生徒たちは、概して競争には熱心でなく、友人と張り合おう、負けたくないといった気持ちも強くない。共生には一定の指向を示す。が、それは「深い友情から結ばれた…」類のものではなく、どちらかといえば、相互不干渉的な個人がただ一緒にいるようなイメージである。冒頭の小学生のような排他的でエゴイスティックな競争は論外である。しかし、友人同士で競い合い、それによって自分も伸びていくような、健全な競争がもう少しあってもよい気がする。

もちろん、そういった競争をしている生徒は、多数派ではないが、存在している。表3

-3にも確かに競争心をもつ生徒が現れている（そして、図3-2で指摘したように、よい友人関係と旺盛な競争心は共存しうる）。

では、この競争への姿勢の差はどこから生じてくるのだろうか。ここでは、その背後にある親の期待に注目し、いくつかデータをみていきたい。

表3-4は、「親がよい成績を期待するか」と友人の有無をクロス集計したものである。表から明らかなように、親からの成績期待が大きいと感じている生徒は、友人が多く、かつ幅広い。「心を許せない人」「対立している人」も少なく、広範で良好な友人関係がうかがえる。

表3-4 クラスメート × 親が「よい成績をとること」を期待しているか

(%)

そのようなクラスメートの有無 よい成績への親の期待 クラスメートの種類	何人もいる		いない	
	とても期待している	ぜんぜん期待していない	とても期待している	ぜんぜん期待していない
1. 気軽に話ができる友人	60.2	59.3	4.5	8.1
2. それなりに合わせていける人	57.5	> 48.8	2.2	< 7.0
3. 一緒に行動する友人	42.4	> 37.2	5.1	< 9.3
4. たまたま同じクラスという感じの人	42.2	42.2	5.9	< 12.8
5. 心を許せない人	22.7	< 27.9	18.8	< 23.2
6. 何でも話せる友人	19.4	> 15.1	21.7	22.1
7. 勉強上のライバル	12.0	> 5.8	48.4	< 70.9
8. スポーツ上のライバル	8.2	< 12.8	72.0	> 64.0
9. 自分と対立している人	4.8	< 11.6	74.1	74.4
10. 自分をからかったり、いじめたりする人	3.4	< 5.8	87.5	86.7
11. 自分を使い走りなどに利用しようとする人	2.5	< 7.0	88.0	88.4

また、表3-5では、親の成績期待が大きい生徒の方が、より多様なタイプを受け入れようとする姿勢がみえる。

さらに、競争心の有無とクロスした結果を表3-6でみてみよう。親からの期待の大きい生徒は勉強面ではもちろん、他の項目でも

表3-5 次のような人がクラスにいたら × 親が「よい成績をとること」を期待しているか

クラスメートへの評価 よい成績をとることへの 親の期待 クラスメートの種類	とてもいい		とてもいやだ	
	とても期待している	ぜんぜん期待していない	とても期待している	ぜんぜん期待していない
	(%)			
1. 運動部のレギュラーで活躍している人	54.1	> 48.8	0.8	< 4.7
2. 無遅刻、無欠席、無早退の人	51.6	51.2	2.9	< 3.5
3. 自分の趣味に熱心な人	42.2	44.2	2.8	< 3.5
4. ボランティア活動をしている人	39.6	> 33.7	2.9	< 9.3
5. 成績が学年のトップクラスの人	39.1	> 31.4	3.9	< 9.3
6. いろいろな流行に敏感な人	26.3	25.6	4.0	< 8.1
7. 生徒会の役員	18.3	18.6	5.2	< 11.6
8. アルバイトをよくする人	15.7	< 26.7	1.8	< 5.8
9. 多くの先生に気に入られている人	9.2	< 14.0	11.9	11.6
10. いつも本を読んでいる人	9.9	9.3	14.3	< 20.9
11. つっぱりグループの一員	9.2	10.5	29.6	> 22.1

積極的に競争心を現している。親の成績への期待は、勉強以外の領域へも好影響を及ぼすのである。これは、成績への期待に限らず、

親が期待すること（正確にはその期待を子どもが感じとること）それ自体が、子どもに好ましい影響を与える傾向を示唆している。

表3-6 クラスメイトと競争心があるか × 親が「よい成績をとること」を期待しているか

競争心の分野	よい成績をとることへの親の期待			
	とても期待している	やや期待している	あまり期待していない	ぜんぜん期待していない
1. 友人へのやさしさ、思いやり	23.7	19.7	16.8	26.7
2. 運動、スポーツの能力や記録	22.2	17.8	20.5	25.6
3. 定期テストの順位	30.2	18.0	9.6	10.5
4. 模擬試験の結果	29.9	17.9	8.4	11.6
5. 英語の成績	24.0	15.8	9.3	12.8
6. 数学の成績	25.0	14.6	10.9	8.1
7. 入る大学、短大、専門学校	21.3	10.6	8.1	10.5
8. 楽器演奏やカラオケのうまさ	15.4	9.7	10.9	9.3
9. どんな職業につくか	16.6	8.5	8.4	10.5
10. 異性に好かれるか、恋人の有無	14.3	8.2	9.3	12.8
11. 服装、ヘアスタイルのおしゃれ	11.6	8.9	7.8	12.8
12. クラスでの人気、人望	10.2	7.4	7.5	5.8
13. カバン、小物など持ち物	8.5	5.3	5.0	8.1
14. テレビゲームなどのうまさ	6.6	4.4	6.2	15.1
15. 先生に気に入られているか	1.7	0.7	2.8	3.5

(数字は競争心が「かなりある」割合)  
○は最大値

そこで、親が「友人を大切にすることを期待しているか」についても、クロス集計をとってみた。その結果、ほぼ同じ傾向がみられた。表3-7にまとめたので、確認してほしい。

何事にしろ、親が子どもを肯定的な目で見つめ、わが子に期待をかけると、子どもはそれに応えようとし、好ましい変化を生む。親

の子どもを見る姿勢・態度がいかに重要か、認識させられる。

もちろん、生徒の友人関係や競争心に影響するのは、親の期待だけではない。事実、表3-6、7では、親が「ぜんぜん期待していない」グループも、かなりの項目で高い数値を示している。親の期待以外の要因も影響していると思われる。(第5章も参照)

表3-7 クラスメートと競争心があるか × 親が「友だちを大切にすること」を期待しているか

(%)

競争心の分野	親の期待	とても期待している	やや期待している	あまり期待していない	ぜんぜん期待していない
1. 友人へのやさしさ・思いやり		30.9	15.1	17.2	21.2
2. 運動、スポーツの能力や記録		26.4	17.8	17.8	15.2
3. 定期テストの順位		26.2	18.0	17.8	18.2
4. 模擬試験の結果		22.8	19.2	15.6	25.8
5. 英語の成績		22.1	16.5	15.0	19.7
6. 数学の成績		20.9	15.3	17.2	21.2
7. 入る大学、短大、専門学校		16.2	11.6	15.6	18.2
8. 楽器演奏やカラオケのうまさ		16.0	9.1	12.2	13.6
9. どんな職業につくか		14.2	9.2	13.9	10.6
10. 異性に好かれるか、恋人の有無		16.0	6.4	10.6	12.1
11. 服装、ヘアスタイルのおしゃれ		13.0	7.7	7.2	13.6
12. クラスでの人気、人望		13.7	5.3	7.2	6.1
13. カバン、小物などの持ち物		9.4	4.5	5.6	10.6
14. テレビゲームなどのうまさ		5.7	5.4	7.8	12.1
15. 先生に気に入られているか		2.6	0.9	0.6	4.5

(数字は競争心が「かなりある」割合)  
○は最大値



## 6. やさしきカプセル人間

—コミックにおける競争と共生—

かつて、コミック・アニメの世界で「スポーツ根性もの」が流行した時代がある。代表作は『巨人の星』『あしたのジョー』などである。これらの作品には、必ず主人公のライバルが登場する。主人公は、常にライバルたちと競争し、あるときは勝ち、またあるときは敗北を味わう。敗れた主人公は不屈の根性で立ち上がり、最後にまた勝利を得る。このようなパターンが多かった。

では、現在のコミック・アニメ界の作品には競争的な要素はないかという点、むしろ逆である。少し前まで、高校生を含め、少年たちに圧倒的な支持を受けてきた『J』誌。その人気を支えていたのが『ドラゴンボール』である。最初ギャグマンガとして始まった『ドラゴンボール』は、徐々に超能力を駆使した格闘技マンガに変貌する。1人敵を倒すと、新たな強敵が出現する。主人公の悟空は、修業（「努力」）を重ね、仲間の「友情」に支えられ、新たな敵を倒す（「勝利」）。そして、また新たな強敵が…、というパターンが繰り返される。『J』誌に連載される他の作品も、この「努力」「友情」「勝利」のパターンを基本にした格闘技ものが多い。強いて本報告書のテーマに対応させれば、努力・勝利—競争、友情—共生ということになるだろうか。

かつての「スポ根もの」にも同じ枠組は見られた。しかし、『巨人の星』と『ドラゴンボール』『ドラゴンクエスト』など現在のコミックを比較すると、決定的に異なる面がある。「スポ根もの」の舞台は、基本的に現実のスポーツ界とダブる。実在の球団や選手が登場する場合もあれば、逆に実在のボクサーに「浪速のジョー」とニックネームがついたりする。コミックと現実の社会の距離は非常に近かった。対照的に、現在のコミックヒーローの現実感・存在感は極めて薄い。『ドラ

ゴンボール』の舞台は未来の地球であり、『ドラゴンクエスト』は、竜や魔神が闊歩するファンタジー世界の物語である。「スポ根もの」の誌面からは、汗のにおいと熱気が伝わってきた。しかし、現在の作品群からは何も香ってこない。主人公がいくら汗と涙を流しても、それは異世界のことである。現実社会との距離は無限度に遠い。

ここで長々とコミックヒーローのあり方を取り上げたのには理由がある。それは、最近の生徒の姿に、何か現実味の乏しさを感じるからである。筆者は現在3年生のHR担任である。もちろん、クラスの生徒たちは、受験勉強に励んでいる。模試の答案が返ってくれば、その結果に一喜一憂している。昔ながらの光景であろうが、何か足りない。生徒たちの身近に常にいるのに、彼らの生き様が今ひとつ感じられない、生命感のある感情が伝わってこないのである。

これは、スポ根マンガで育った筆者の世代と、今の高校生の生き方の基本的な姿勢が大きく異なっているためと思われる。本章でのデータを含め、多くの青少年を対象とした調査・研究が、現代の若者が重視する要素として、「やさしさ」を指摘している。現代の若者にとっての「やさしさ」は、相手を思いやって言葉をかけたり、相手のためには耳に痛いことも、あえて言うきびしさにも通じるそれではない。現代の若者の「やさしさ」は、相手の感情や行動に影響を与えない（傷つけない）、相手の心に踏みこまず、距離を置く「やさしさ」である。

かつて、情報化社会に生きる若者を、ある社会学者は「カプセル人間」と命名した(注)。情報で満ちた大気の中を、若者がカプセルに包まれ浮遊するイメージである。そこでカプセルは、自分にとって必要な情報を取り入れ、

不必要な情報ははじくろ過器でありバリアーであった。筆者には、別の意味で、現代の高校生はカプセル人間に見える。こちらのカプセルは、互いに相手の領域に踏みこまないように、そして自分の領域に踏みこまれないように張る「やさしさ」でつくられたカプセルである。コミュニケーションは、カプセルの膜を接触させて行う。カプセルを破ろうとしない限り、いくらでも共生は可能である。

本章で考察してきた現代高校生の競争と共生のあり方も、上記の生活スタイルを反映しているように見える。

一部に、旺盛な競争意欲を示す生徒もいた。その生徒たちも、「相手を打ち負かして勝利を得る」というより、競争をゲーム的に楽しんでいるのかもしれない。「やさしさ」カプ

セル人間には、ムキになった競争は不似合いである。社会のシステムの中で用意された競争は無難にこなし、あとは、互いに傷つけないよう共生する。本章のデータからは、そんな生徒たちの姿がにじみ出ているように思える。

このような生き方を現代社会の必然と考え、私たちは受容すべきかもしれない。しかし、(古い発想かもしれないが)健全な競争は、社会発展の活力である。これから「やさしさ」カプセル人間が増え、社会から競争的な要素が少なくなっていくとすれば、いささか危惧の念を抱かざるをえない。

(注) 平野秀秋・中野収「コピー体験の文化」  
時事通信社、1975年